その「物語」、の物語。

"ペログリ"的複眼思考の味わい vol.134

a taste of Ya'ssy

田中康夫

たなかやすお●'56年東京生まれ、作家。'00年より長野県知事を2期務める。'07年に参議院議員に当選。'09年に衆議院議員に当選、1期務める。『文藝』(河出書房新社)2013年冬季号から17年ぶりに小説の連載を開始。【公式ブログ】http://www.nippon-dream.com/

森田一義氏と初めてお目に掛かったのは33年前の昭和56年＝1981年3月。銀座七丁目の岡半本店の座敷で、しゃぶしゃぶを食べながらの対談でした。篠山紀信氏の「激写」で耳目を集めた隔週刊誌「GORO」の企画。

その丁度1年前に停学処分を受けて留年し、大学の図書館で書いた処女作が「なんとなく、クリスタル」。「文藝賞」を受賞し、1月に単行本として出版されると「社会現象」という〝青天の霹靂〟に僕は直面します。

「まだ力と若さを保持していたこの国が近い将来、急激な出生率の低下と急速な高齢化を迎える」「33年前に、この黄昏れる世界の出現をたった一人で予言していた」「資本主義という『巨大なる商品集積』の世界の宿痾を描いた作品」。

今でこそ高橋源一郎氏から〝過分な評価〟を頂戴する作品も往時は、「その辺の若者が時代の表層を描いただけ」「こんなものは文学ではない」と冷笑・嘲弄・侮蔑の〝一億国民戦線〟状態でした。

ですから、対談後にラジオ番組で彼が「単なる一発屋かと思ってたが、ひょっとすると、なかなかのものかも知れない」と呟いて下さったのを周囲から聞き及び、純粋に嬉しかったものです。僕は24歳の〝青二才〟でした。

「笑っていいとも！」で御一緒するのは番組開始の'82年10月から3年間。金曜最後のコーナー「五つの焦点」に山本コータロー氏と出演しました。月曜から金曜まで5つの視線で、あ～でもない・こ～でもないと硬軟取り混ぜた時事問題を喋り合う10分間。今は無き「FOCUS」が前年に創刊。写真週刊誌の黎明期でもありました。

持ち寄ったネタを出し合うものの、寧ろ番組前の打ち合わせで盛り上がっていたのは毎回、「東京ペログリ日記」の萌芽とも言うべき各人の1週間の身辺雑記的な報告でした。今でも覚えているのは飯倉片町の「アル・カフェ・キャンティ」でタモリさんと遭遇した一件。異常な盛り上がりを見せた苦甘い遣り取りです。

当時は隣接の日ノ樹ビルに田辺エージェンシーが入居。田邊昭知氏や川村龍夫氏を始めとする経営陣や所属アーティストにとってのラウンジ的位置付けでした。で、〝ブチック恋愛〟と嘯いて複数の女子学生と並行恋愛していた僕が、その一人と入店すると「おっ、ヤスオちゃん」と先客だった彼から声を掛けられます。

然りとて踵を返す訳にもいかず、少し離れた席に着くと、有ろう事かその相手が僕に訴え始めます。どうして私は貴方の一番ではない訳と。彼女は敢えて直訴したのかも知れません。涙腺が緩んでもいないのに、涙声で。

その彼女の口調をタモリさんが「再現」するや、スタジオ・アルタのスタッフは大爆笑。苺とアイスクリームの「カルメン」は、奇しくもその時に彼女がコーヒーと共に頼んだ一品です。いやはや、何たる知能犯的情熱。

タモリさんに「再現」された20代の苦甘い遣り取り

今週の逸品

カルメン 1994円(税込み)

「アプレゲール」な時空として歴を刻んできたキャンティは、東京オリンピックよりも4年前の1960年に開業。その伝説を彩る登場人物には事欠かない。地階はレストラン、一階がカフェ。イタリアンならぬキャンティ料理として今日に至る。夏季にはグレープフルーツ2個分を割り貫いた1個の中にゼリー寄せとしたボンベルモも味わえる。背伸びして学生時代から訪れていた僕にとっても「舞踏会の手帖」時空の逸軒。

【キャンティ飯倉本店】東京都港区麻布台3-1-7 ☎03-3583-0145 ㊋11:30～26:30(LO)、日曜のみ～22:00(LO) 無休 http://www.chianti-1960.com/

illustration by Hajime Anzai